

特別支援学校の教員として

福島県立いわき支援学校 教諭 市川 裕太

特別支援学校に勤務し、2年目が終わろうとしています。1年目と同様、他の先生方の支えや、生徒の頑張っている姿に励まされ、教師としてかかわれていることに感謝の気持ちでいっぱいです。

昨年度は初任者として、右も左も分からない状態でスタートしました。そのため、授業はもちろんのこと、普段の生活での生徒への言葉掛けや対応など、多くの先生方の指導場面を見て学ばせていただきました。先生方の指導を見て感じたことは、生徒の目指す姿を明確にして指導しているということです。その場だけの指導にとどまらず、生徒の成長を見据えて継続的に指導することで、生徒の成長にも繋がるのだと実感しました。

今年度は学級担任として、初任者研修で学んだことをもとに、自分なりの考えをもって生徒とかかわっています。担任を経験し、1番強く感じていることは、担任が1人で指導するのではないということです。様々な場面で、同じクラスを担当する先生や学年主任、学部主事、または、地域支援センター担当の先生、SSWなど、たくさんの方々に関わっていただきながら、生徒の指導を行ってきました。先生方や関係機関の方々に相談し、アドバイスをいただきながら進めていくことで、悩みを1人で抱え込むことなく学級運営を進めることができています。また、2年次教員フォローアップ研修では、望ましい生活に結びつけるための保健の学習指導について研究を行い、学んだ知識や技能を実際の生活に結びつけるためには、他教科との連携、家庭との協力が大切であるということに気がきました。学級経営や授業の計画、家庭での生活指導など、どんな場面でも先生方や関係機関、保護者と連携を図り、生徒を指導していくことが重要であるということ学びました。

これからも、多くの先生方にご指導を賜りながら、また、ご協力をいただきながら生徒にとってよりよい指導をしていきたいと思えます。

生徒たちから学ぶこと

福島県立平支援学校 教諭 梅原 真智子

私は新採用教員として採用されてからの2年間、生徒たちから多くのことを教わり、また気づかされました。その中で、特に2つのことについて考えさせられました。

まず1つ目は「教材教具の工夫」です。様々な学習に取り組むことができるようにする中で、「どうしたら生徒が自分でできるようになるのか」を考えながら補助具を作っては失敗の繰り返しでした。しかし、色々な補助具を使うことができるようにしていくと、生徒たちから「私は、この動きならできるよ。」と得意そうに動かして見せてくれたり、「これを使いたい!」と自ら補助具に手を伸ばしたりしていました。一方で、扱いにくい道具は手にとろうとしません。生徒たちは正直です。私がそれに気づいた時、教材教具の工夫ひとつで、生徒たちが自ら取り組もうとする姿を引き出すことができるのだと知りました。同時に、生徒たちが表出する些細な動きを見逃さず、教材を工夫していく重要性を改めて考えるきっかけとなりました。

2つ目は「関わりすぎない支援」です。生徒たちを見ていると、ふとした瞬間に「一人でできた!」という場面を幾度も目にしてきました。そして、その様な場面のほとんどが教師の支援が少ない時です。それに気づいてから、私が言葉を掛けたい気持ちや支援したい気持ちを抑えて見守っていると、自分で頑張ろうとしたり、生徒同士で作業に取り組んだり、生徒の自主的で意欲的な姿を新たに見ることができるようになりました。生徒たちの「自分でできる力」を私が奪ってしまわないようにしなければ、と教師としての自分の行動を振り返るきっかけとなりました。

2年間で多くのことを生徒たちから学ぶことができました。私は、これからも生徒たちとともに成長し、常に学び続ける教師を目指して教員人生を歩んでいきたいです。